



北窓鎖襖

後二

15
1601
6



48  
1601  
6

形茂  
藏書



北窓瑣談後編卷之二

梅華仙史稿春暉著



一八橋檢校築紫筆次り彈今の組より

十三曲より古組より長組より落梅より心畫 為書

天下太平 雪朝 雲上 此七曲より東組より 唐衣

桐壺 須戸 四季曲 扇曲 雲井曲 此六曲知り

初ハ如此小表裏と二等より分りたり此後小四等小

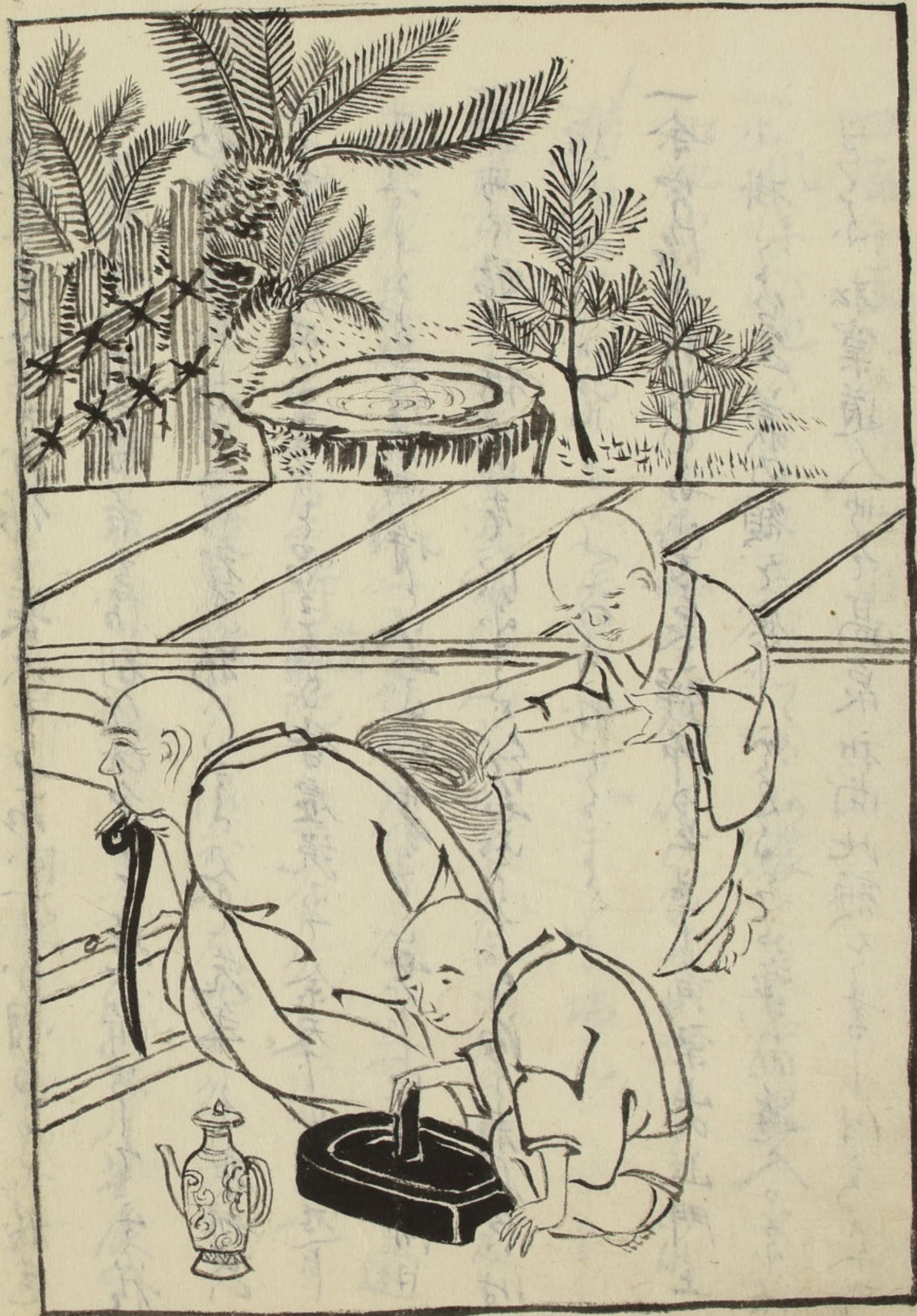
ち新曲より中より色々成りてを調子と但し彈はる一

越乃律を宮而立て合せし誰人の心ありてある由り

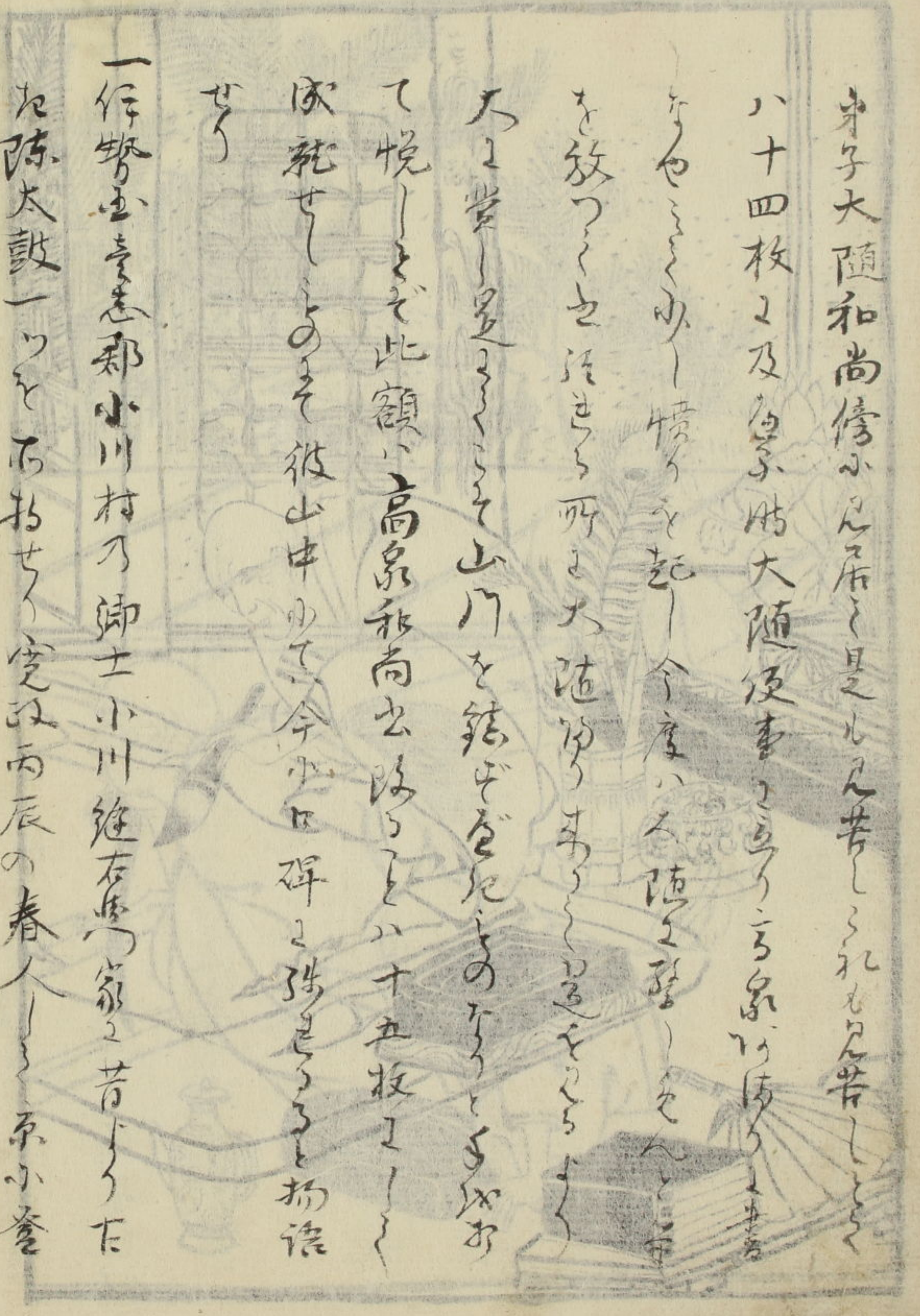
是越を用ひ筆ハ二の法宮なり







才子大随和尚信小尼居是山ん苦しく礼も苦しく  
 八十四枚之及白家時大随使事より言家時ありし書  
 々々々々少く惜りて起し今度ハ大随に書しをん  
 を放つて之を流さる所之大随ゆりありし書を  
 乃之書し是れ山川を結ぶるの事なり  
 て悦しとぞ此額ハ高泉和尚出法よりハ十五枚  
 成就せしよその彼山中にて今少く碑之跡  
 せり  
 一作勢山志郡小川村乃御士小川経右馬  
 家之昔より下  
 丸陈太鼓一ツを所持せり寛政丙辰の春人  
 系小登



一余之見せしは實に五六百年以上の古物と見ゆ  
 桐あり横本を用いハハハ合せし朋とせばハ片西  
 敷面に龍を画く敷の経る表一尺五寸三分深四寸  
 裏の方々経り一尺四寸五分経の既経る四五寸  
 経裏之不透明の桐木の厚四寸或人の説ハ唐土の物  
 なるをいふ  
 一寛政八年丙辰春唐土乾隆帝在位六十一年少して皇太子  
 子に讓位り今年正月元日ハ皇太子即位年号を嘉  
 慶と改めらる六十二年ハ讓位りハ康熙帝在位の  
 年收之報を事々々々々又ハ甲子を應じ

かつや何ものれ希代の盛事なるを帝の上諭<sup>カ</sup>り、  
隆帝より上諭とんきて板行のしりて唐土普く頒賜り、  
長崎へ渡り来る唐人の持くる或るものも先づて医学院  
のくはせしむる事なりと記す

一春暉七八才の時或夜父母の傍に立し折而考孟子を讀  
むひし或るくもるもふ事と云ふ事なりと存する  
し先考汝も讀て少も一しを以羊代牛の章を講し  
せしむし小堀のくもるも覺て泣居たりし先妣も  
ん多むく又前漢しむぬ是く先考の形ひなりて折  
孟を少く讀法とむひく字同くもるも申すのくぬ

此以子才の彼章と海を少く三十五六年の昔を  
そのくもるひし又母の恩義の深きも新也す小  
きくし

一香川太仲若くし時治療の爲に奔走せし小ほひ途中  
あり小水を使せり毎し川人いふる所を病し小水  
家は内り便所へ便されり此の耕作を訓とるなり奈  
何と途中毎月と便しりてんやと答へられしを太仲え来  
豪放の氣質たれり志を所は源切を殊傷のりたり  
一寛政八年丙辰奥州南部の孤漂流し安南に在り  
を彼より唐土へ送りし事の長崎へ送り居たり

難風と違し三年として日本に帰ると安南国王  
明主として在任と久しく寛政丁巳彼国より景光五  
十六年とぞ景光の安南王の年号なり

一是も寛政七年を唐王蘇列海濱の嶺北純風より吹  
流りて奥列仙臺の領を乃海濱に漂着せり丙辰の暮船  
中の漁人七八人仙臺城下小呂亭に北園東へも御伺を  
せ御侍の百目許も唐人をも皆仙臺城下小逕をせり  
其島の役人志村善藏とて先年法皇漫遊して京師  
より久しく過るやし蒙りて仙臺侯の儒真あり奥列  
唐人の逗留せりといひしはあれは法人尼柵小呂島迹

を乞又ハ... 詩を寄せたりとて之未漁夫のまを  
... 文育の... 跡も是若く... 詩も... 語を... 物も  
... 我教... 法人の乞ふ... 一物  
或も扇面を... 又逗留の... 跡作...  
故... 上達し... 内  
二三人丸跪白... 作...  
御下知... 後長崎へ送... 役  
人... 途申... 聯...  
藝別の... 余... 途中の... 字  
して贈... 彼... 日本... 同...





物語のしむるの奇とをり所が日本の面目なり

一紀山南松院殿の各たる系武將とありしと實小今余作  
玉小述びくくく初歌浦造の畫塔の模倣又と楊葉治の  
やうそ風流を志されたり又概下り初歌浦へ出る道なり  
大石と大書し文字を彫付られし朝鮮の李梅溪り出  
たり又初歌浦の向ふたる官の流石も石西法なり李梅溪  
り大書を彫付られたり風流の事なり珠小石と記し將  
ハ文章も疎く流石なり

一余の友紀作の家中と野呂何某秘蔵の服若く金乃象  
服跡も真田左衛門帯之の字なり上小流塵の二字是

一も象服も入きり真田の銘なり作ハ字ハ玉乃

一糸玉廣らげたりとりもも象服も入きり真田幸村ハ

一武界のしとしいは流塵の二字丸流の銘なりは乃武

一夫乃しとたはりど此服若高亭山より出くは米乃に室

一カかり

一紀列の士小田何某道に鏡一領をとりしそ鏡の寸法

一皆白石先々の著きし軍書考中の楠と乃鏡小寸法

一送り小田子秘蔵して堂就けりあり

一乃雅堂の画蘭亭歸去来西園雅集皆小楷賛辭り此三  
幅を々年七十五令小求りし法候りしと近世の書画

ふくかゝる資料の多し及び大雅堂の書画の秀麗なり  
也又南今都鄙ともに書画流りゆゑも彼画幅もよき紙  
表具もたゞしきと

一肥後玉川氏の士西垣氏寛政六年長崎より古琴をばた  
てて宋初の琴より宋政所拊の物ありしと西垣より紀  
代作の其図様を模せり余も人より得たるも同く真  
物なりやい

一伊勢玉柳系の湯の南小倭御中佐田村の所紀貫  
之乃塚よりいふなりといれり

一紀効新書、明の戚南塘の著を所りて其家有益の書

又此同人乃作小煉兵諸書といふ一帙あり南紀

小田氏の家より此を一見せり珍也なり然も疑  
らく戚南塘の武名に倣て明末の人偽撰せりとの  
紀効新書の末ありて

一唐玉々々法蘭西の孔子の像杏壇の星多を侍  
立の弟子十四人なり東隆の泥ハ十哲小曾子有子子張  
子羔をわねた系なりと云ふとて近江近江玉小

川村若樹書院所蔵の杏壇の星をり小亦十四人なり李  
仲和の画なりといひ傳へ印也なり又若樹書院所蔵の釋  
祭乃式を云々巻物なりと云はれり十哲小曾子有子

子思孟子と記す此巻物の明末の物と見ゆけ流東屋の  
説より夫たりし御説は是なるを言ふや

一 薩摩小一士人なり若此の如く常人の良なりて深徳佛道を  
修しふらりし每人相善善徳と稱し世中を意しせを奇異の  
人なり佛画をくく多く画り又經文の文字を細く  
くくわのたし佛像小たふやふ画に信心の人小を附  
て雲衣の行御たしハタテ彼玉小しりし此人を拜しけ善  
薩或時別有夜夜一物清くてもハ夜交人静くても夜  
禪觀法の折席とて若此女乃夢して三味線を彈き端  
哥を艶くもくくわを遠く行く何となく心動くものなり

そのらり美人をくくも情も我もつものくく下  
かり年若人き深く思ひ惚むる事小くてもくく  
と昔くくくく若長余の清くた若歳を薩摩の人く余  
彼面を存しし孫小親くく文く一人なり

一 本邦の俗十月を神毎月としハ和書を説人拾の只説  
きくも 昔年薩摩會の説のくく信する小くく余考多小  
本邦俗家用る律呂の配節壹越律と黃鐘律小由り  
十一月の律とくく小十月乃律ハ上無律と南は是く依て十  
月を上毎月とすなり

一 紀元和歌山より二里より東小岡田といふ所よりくく地小

素衣の角之進と人より素衣淨正少弼乃後亂ふく旧  
家なりて家下昔より喜山の隠翫を侍侍しく今ふり  
珍藏たりしを家の聲浪花河内を三右衛門物語たり

一宋の昂耕和尚大徳寺の祖南浦を送る語小云 相送當  
門有脩竹為君葉々起清風 白隠和尚此語を讀て喜て  
曰得言活三昧との後白隠和尚僧徒小佛法を説示し小  
自申をねられしと

一淮南子小文王十五歳よりして武王を生むと志すて聖  
人の天地の秀氣を得てはとのふれは其陰陽の氣  
と又たる事の早さ也

一破のはいなる物や和漢といふ古の法の絶ゆる處  
を殘念なるれ外科大成がどふし取の法の法ハ笑  
ふぶきの甚なりと変るなり

一津交ハ日本のこの屬む小胸より上品なり唐土の産を  
日本乃少をいふはしりしも日本日本の内少も志  
甲乙なり一因の中は其たの差別りりし浪花の  
後田氏所持の茶園根及中山の近邊小なり茶園の尾  
一林村は虎をよみ本之部村小虎をよみ終り二村  
の方三里許を隔てたり小木の部村の虎を根上上品  
なり井田小虎をよみ虎をよみ同なり後田氏物語なり是

いづくも各區別録の羊皮の量のとて箱合せしむるが如し  
黄連茯苓も日本のもを不固に胸よりしそ

一 浅見細舟先生赤心報國と上四字を彫りたる刀以て  
帯せしむると少居しう浪花の春田伴達此刀は信守金道  
所おやり余春田氏より今申は信守金道  
他より長二尺三寸幅一寸三分の四寸深にしるす殊  
の外の大物なりは赤銅の一枚なり其より其の裏  
表に赤心報國の字置上りてしう楷書なり細舟先生  
自筆のしう西依成舟先生書定の跡ありてしう  
浪のすしうの角形も厚し縁頭は法より今竹を合象眼

小少し入きしう柄は元徳巻なり赤心報國の四字は毎式移る  
脊中小點し居しうし文字なりしう

一 浪花の松木月助奉時道人と号する人の家小三足の蝦蟇  
の乾物なり法名家の詩文よりて富ふ奇品なり其後の物  
法より今と年又六脚の蝦蟇を好しうと天地る毎に物を  
りしうしし

一 河内山坪井文の社勢分田修理は石川原氏乃後胤なり  
下置物多し一柄なりハ幅方郎の弓もより楠無しの鏝  
しるす神功皇后の銚もりしう銚長刀の如しし下坪  
乃し其金物よりて柄の傍より身を有たるものなり

憲廟 有徳廟の御時少し上覽小入り

一伊勢山田外宮の宮崎の御文庫小俵藤太秀卿の太刀を

有徳廟の御時上覽少し入本阿弥鑿定を唐しとごて付

才を唐しを官より白鞘と銘あり作り作を神息と云ふ

と云ふ銘あり長二尺三四寸許り直焼あり柄と才と同

銘あり連なりたるものなり頭の飯を扱き金物をえまを

鐸頭の方へ括りたり柄の銘享サ三介許元束の鞘ハ木

綿の包に漆を塗たりと云ふ奇製の物なり

一伊勢松坂の西三里許小日川といふ所よりけり五輪の

石塔百餘あり中一ツ月出石小唯一乗法といふ五字を

彫たり石よりせりハ文字も塔をいつと云ふ家六

代御前の石塔なりと又文覚上人の碑もといふ日川

といふ村の堀坂山乃藤矢下村の隣村なりといふ六代御前

の舊跡といふといふなり

一寛政九年丁巳九月伊勢玉揃田の異敷と云ふ民家

乃井の中よりたまりて捕らる形狐狗の毛色茶

福小く細微の籠毛より四足乃凡志鏡やう籠の凡小仙

より面長く目をとりて人をもたれり

乃旅人小諸より小彼面よりてと云ふなりと云ふ

と云ふ伊勢山田小きコアと云ふ異敷より程の大なるもの小

たけ 彼井中小流なるもそのコヤコヤも 野野と我友又橋  
田乃奥田太民物語なり

一 熊野海原とて三大邑あり 木乃本 雄鷹 長崎と云々

十軒の所なり 土地狭隘なり 傾傾富饒の地なり 故鷹

木乃本 田より浪原へ 出る同道の近なり 險阻を越え

大和吉野郡上市村小出 壯者二日とて 上市小達を浪

花より四日改治とて 遠き志の日に ありて 壯者三日とて 遠き

と云 比乃を 坂坂とて 主産山の一里西を 爲て 行

地を主産とて 上上とて 峯の南の方より 二筋なり 二筋を

池の嶺由ると 上上の山山の 麓に池とて 池中小神靈なり

又池水の中 小流本とて 物多て 此流本本とて 小流  
行を行とて 必大川大雨等とて 行

一 王臺山ハ 熊野の奥 小高とて 和良吉野郡の深山中の言

山なり 信勢の言 川熊野の新宮川 紀列の紀の川 此三川

の水源なり 中王臺南 王臺北 王臺の三峯なり 中王臺ハ

最上とて 行

一 熊野、東西を長く 百里小道 一熊野とて 南北を 越く海

濱 小入る 終終五六里 六七里 八里 大和吉野郡

なり 中より 東小とて 信勢なり 熊野の山 奥小 柳の平地

とて 六七里の 乃ハ 氏家あり 木の平と 山奥小 百ヶ村



狩りもつて一里半程いひ必民家も御所の平地に  
 ありしとれり四五下と方周にたる平地に絶てり  
 一承久二年三月朔日御院聖合よりそ記録巻物にて刊  
 相号詳なり奥書小西園寺相国公相と御自筆の字を以  
 て書り字々特明院二位公時卿許可門人井上光美書と  
 ありたり

- 九番 左未流持
- 二番 左木繪持
- 三番 左花園 左勝
- 四番 左賢心 右勝
- 五番 左十二時 右勝
- 六番 左大鳥 右勝
- 七番 左大唐花 右強持
- 八番 左言月 右強持

- 九番 左白竜 右新白象 左勝 十番 左大引 右毛長天 左勝
  - 十一番 左滑橋 右太紫槽 左勝 十二番 左良道 右之與寺 右強持
  - 十三番 左玄象 右牧馬 格別之末物不取 勝貴く沙汰也
- 一延表の御物小名物の御院聖十七面より今の茶亭家小  
 御所持の巖とて記登此十七面の内なりとて

一當今依見宮の御秘藏の才一の御院聖と大虎と今八甲能  
 れるものと先年狩を御し 花園帝の勅封し七月  
 潔齋して御し 官少御 潔齋して御用封  
 のしりて御封やをたるとれり次の御院聖も孔在  
 たりしと名物多しと

一村兼といひ置置甲しと 誰とく 伴舞山田古を具や小ま  
草とゆく村兼と甲の妻小見えしれどおとと 湊て古道  
具の舎たしと毎小のりるるふと 終り四文と分はりしを買と  
二三年もよりか後小尾張の人買とて村兼をさしと  
初りも後江戸の方へ 金七十五兩とてしとてしとてしと今  
い何人のふ小のふとや

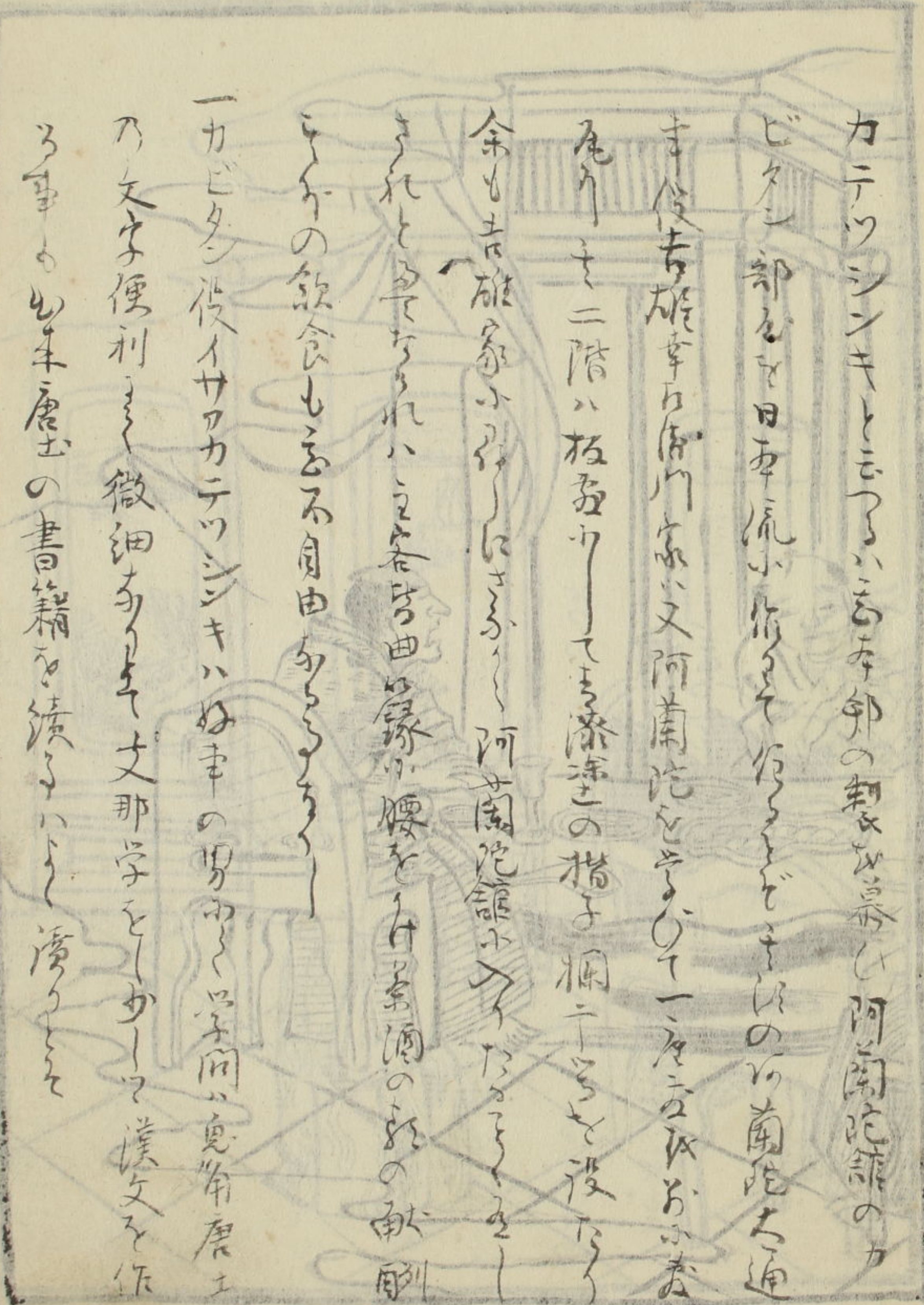
一寛政十年戊午の年三月八日湯太の人池田高之助上京して余  
の家小返るし余は存心本下のびとをうして新小びこ  
一西と仙とおくと始て都小とて道とてしとてしとてしとて  
旅を美耶古とてしとてしとてしとてしとてしとてしとてしと

一澤庵和尚の道成の外只茶事なりとて各とてしとてしとてしと  
初終しとてしとてしとてしとてしとてしとてしとてしとてしと  
心とてしとてしとてしとてしとてしとてしとてしとてしとてしと  
丸光座に脚点の百有しとてしとてしとてしとてしとてしとてしと  
いづくは鶴の歌

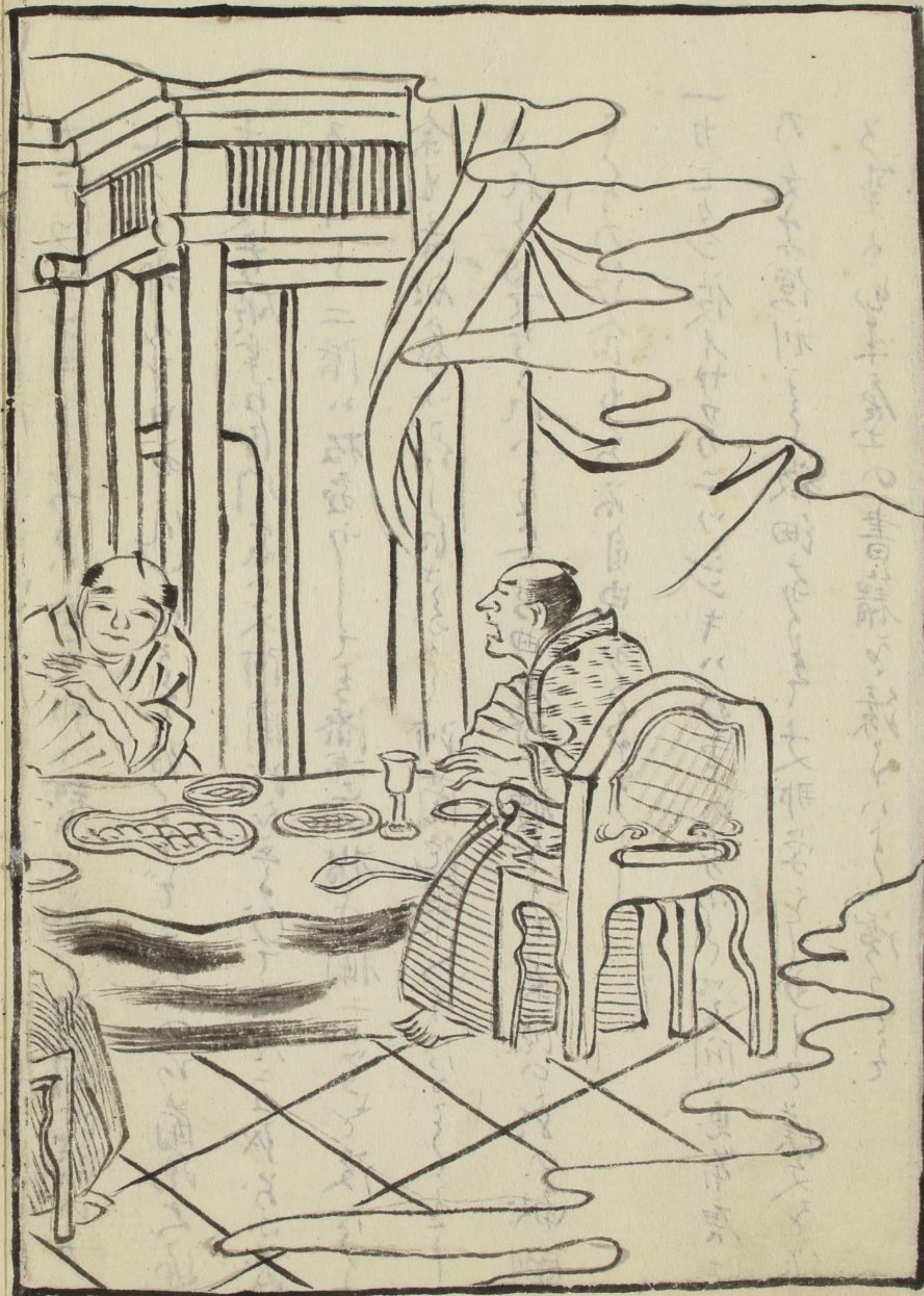
わらの年よはうとてしとてしとてしとてしとてしとてしとてしと  
光座にも殊と感しとてしとてしとてしとてしとてしとてしとてしと  
ら座に書とてしとてしとてしとてしとてしとてしとてしとてしと  
字馬丸光座の脚点とてしとてしとてしとてしとてしとてしとてしと  
飯に年歌の文とてしとてしとてしとてしとてしとてしとてしとてしと

一安永年間或諸侯へ朝鮮国より贈りて乾隆帝へ朝鮮王  
御前献上の物の一は、糸御前奉所の彫物師長常へ  
赤銅の手爐の火を小八重葉のまかしを至極丁寧小  
けしきり、價五百令のりやて地金の入るる小女  
彫物の丁寧を第一の精力をそとて造り東小大日本  
越前大掾長常と今の象眼銘を入き贈りてとて象眼  
も千ナリ象眼とて年々悪ても極まるる子孫の細小め  
たしとて是等い西自のりやて

一日本の大掾子やと高小物とて極まりは仕方とて安  
永天明のりよと侍へ来り居り阿蘭陀のガヒタに役イサカ



カテツシンキとてつゝいふ本邦の製を慕ひ阿蘭陀館のカ  
ビタニ部をて日西流小作をて作るもどまはの阿蘭陀大通  
寺後寺雄幸の御所家又阿蘭陀をそびて一層を以て小表  
尾りて二階ハ板をりてと漆塗の指子欄干を設け  
余も吉雄家小作にさふゝ阿蘭陀館小入りたるもとて  
されとてやられハと各各由録ハ腰をけ茶酒の飲の献酬  
とての飲食もさる自由ありとて  
一カビタに役イサカカテツシンキハ好事の男ありて学問ハ寛永唐土  
乃文字便利も微細ありて支那字をい少く漢文を作  
る事ハ寛永唐土の書籍を讀みいよと漢文を













水より西のなる龍骨車の如きよものより以上乃物法  
嶋川生れお法をうた

一 休和尚の母君未朝少一休亦尚一 耶日まふら女の思とく  
字丹翁れ持修く居るまらるを信して記すも文也

未秋等安楽の縁を地無為の都み娘の御才に出家小成  
と里より佛性の是成磨に十眼より秋等地獄小落るる為  
さらり不引信する居るくんとあをし秋如達摩死も奴と  
なりまらぬ人小成りあひり俗とて不昔の佛四修  
後法し思ひ修る小一字不説と宣し十六秋と足成し悟ら  
り肝要の何事と莫妄想らるる

九月上旬

不生不死牙

十常九よの

くもく、方便の説のい知守る人る善法と同一半小い  
ハの法の聖教をく小修了の伴性れは成磨りす人えけ  
みやのまも解しごりつ

一 文湖洲竹詩一字至十字為句

一竹竹森寒潔祿湘江頭渭水曲惟慢翠錦戈矛蒼王心虛異  
衆草節勁踰凡木化龍枝入仙坡呼鳳律鳴神谷月娥巾帽  
靜舞々風女笙竿靖款々林間飲酒碎影搖鐔石上圍碁輕





こゝに或ヤ二三百金にまゝに積むるのか一と過る家小を  
皆捨くし奇中の怪事とよべし是を商賈の幸利を射  
るが為小作家れどもを成此を求むけ方のねらふを  
彼方小賣りしとらち毎に倍々其價お増して終小如紙  
小玉まるかろう是きて少の奇品牡丹花名花を價百  
金もあつたものも人の物捨小のいざ屑一が百金の外に  
山草ハいふ笑も及ばるし小世上利合をんちよ  
りかゝる怪事もあつたものぞ

一江列山田の油井木より大禁信勢の山中に信派をの加  
鳴りしとる海舟と奇不を集め終る名をりしと外も三

都の申代好事家候玉の這人藏石此名小言人近年夥  
し余も流泉の奇不をり小等一家の藏あり三十五十種小  
あり五日十日の力成りしてしつ眼成りしと成りたりし  
多起申りし格利小目成りしと成りし珍奇の物成りたるあり  
源とて物候小過し年比必より人成りしと成りたる大の夜光  
の玉ありしと一室成りしと成りしと成りしと成りしと成りし  
産小主人に花しと成りしと成りしと成りしと成りしと成りし  
内許は白刃を小足之令土下兩小取べし又と成りしと成りし  
小大なる文字一字しても成りしと成りしと成りしと成りしと  
成りしと成りしと成りしと成りしと成りしと成りしと成りしと

我身代不残の力女を了して来へし多に嫌して玉りし  
と云ふ事なき故にの位もきてかきぬ亦云まできと思  
ふ又紀列より水晶の中よりきりてき水中小魚の遊りせ  
るも何れも人よりいふは七七ねる令の傍にわんとし  
中へはるいえをしてきを破さうといひやし七七鶴と  
思われぬ又ち初玉小掛目の重さも滑きる石なりといひし  
水人と云ひくえうせ衡してくさう少くも怪をばらふなり  
唯より花々に怪をさるるなりと云ふはありしと喜多人  
のいひるは奥までなりやうぬきくこれと世の中小掛羽の  
奇石珍玉ハ喜死よあとしりしけ物清ふ言さ小巻なりし

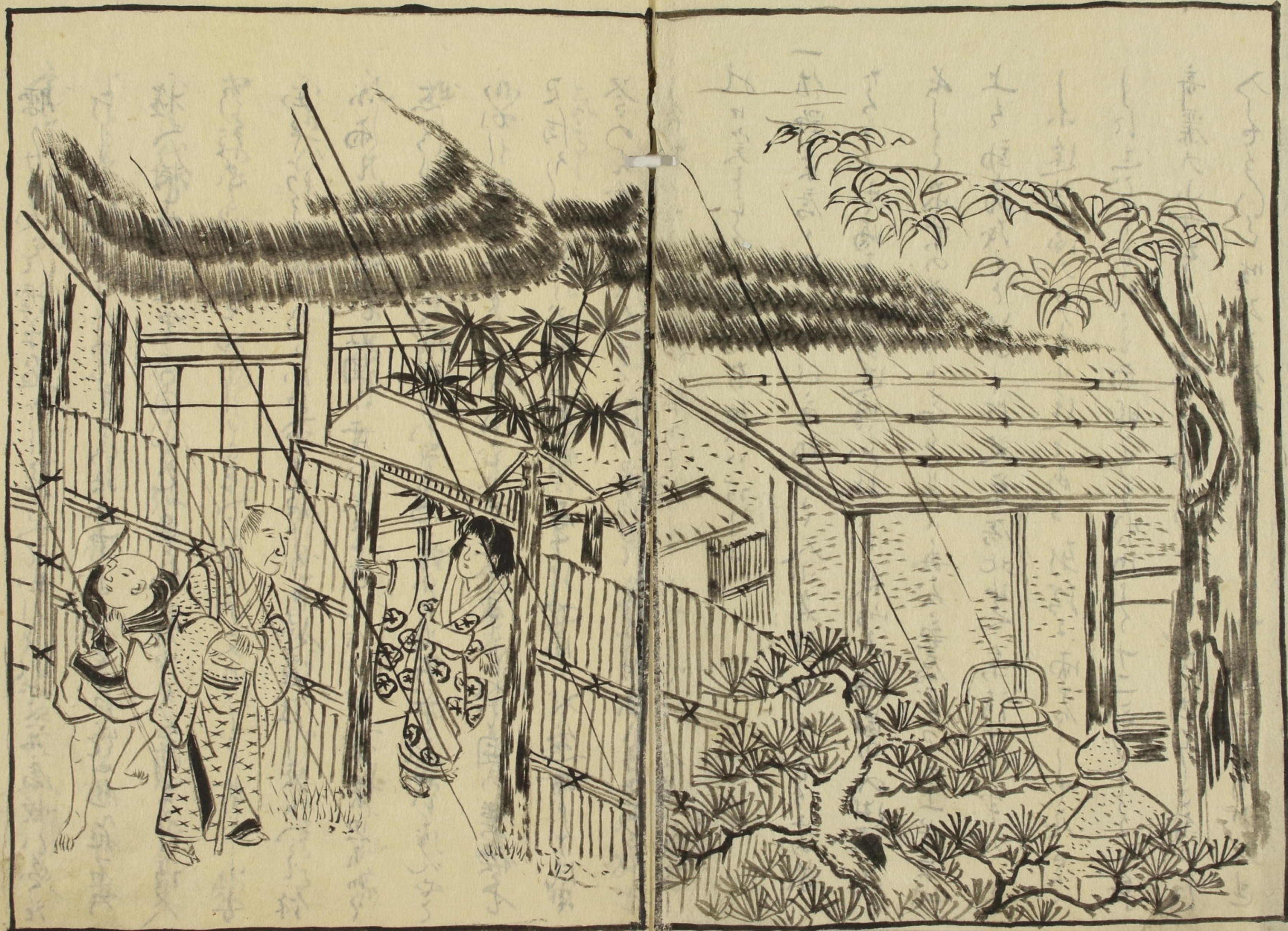


一加崎を原き古所雁小羅冠雄黄石乃足平なうありきエカ  
挙二ツ合せしきうきうきうて色珊瑚のしく元潤りき無雁  
とく珍奇の品あり

一筑前の具原先生京都極楽の時にき年若く居あひり折  
くき崎京の青橋小挺ひく小紫とよみま小紫とよき極学  
乃年浪さうくゆ玉の付小紫別を惜こころ姿状珍小字  
姿こそ珍小字はきしり小字心も年い及り

と一首の歌を詠しきりて具原小紫とよきとよき小紫とよき  
而吉野にき先生いよきの人小あはれさうき一言は極人  
とて餘の上小









て彼所よりいふを聞きしにこれに兼高とて名をたて  
入心礼をなすも其程よく我うし心動くやふ女事小具  
したるや船奪りしとてやうに記して衣向違  
入る婦子の書もあつたうとて佐世の家裏へいれし  
松之子流傳にたりと云ふ

北堂遺談後編卷之二終



及内丹五

